

# 屯どんづる鶴ぼう峯ものがたり

峠で出会った少女はいったい誰だったのでしょうか。  
古事記の世界へ誘います。

企画・制作  
町づくりを考える会  
かんがく  
侃諤倶楽部

## 峠の少女 おとめ

二上山は、大和から見れば太陽が沈むところで黄泉の国の入り口であり、難波から見れば太陽の昇る生命の再生の場所として、古代の人々の信仰を集めてきました。

また、この二上山の北の稜線につらなる穴虫峠は、古くから鎌や刃物に使うサヌカイトの産地として知られ、河内と大和を結ぶ交通の要衝としても重要な役割をはたしていました。

そして、女王卑弥呼を葬ったともいわれる箸墓古墳は、大坂山（今の穴虫峠）の石を運んで、昼は人が作り夜は神が作ったと、日本書紀に記されています。現実には、この古墳は穴虫峠付近でしか産しない凝灰岩で作られています。

このような穴虫峠を舞台にした、美しい少女にまつわる不思議なお話をいたしましょう。

今から千六百年ほど昔、仁徳天皇がなくなり、第一皇子であるのちの履中天皇がまだ皇太子で難波の高津の宮にいた時のことです。皇太子の次の弟が、天皇の位を奪おうと兵を集めて宮殿に火を放ちました。

この時、皇太子は神祇りのあとの酒をたくさん飲んでぐっすり眠り込んでいましたが、家来たちに救い出されて、危機一髪のところ、炎の中から逃げ出すことができました。

大和の国に入るために、皇太子の一行が穴虫峠にさしかかったところへ、ほっそりとして色白の美しい少女が現れました。

皇太子は、ふしぎに思いながら、「この道をどう行けばよいか」とたずねると、少女はすぐに

「武器を持った者たちがたくさんでこの山道をふさいでいます。引き返して、ぜひ当麻道をまわって大和へ越えて行かれますように」

とこたえました。これを聞いた皇太子は、

大坂に遇ふや少女を路問へば  
直には告らず當麻路を告る

（大坂で会った少女に大和への道をたずねると、大和へまっすぐに行く道ではなく、まわり道の当麻道を教えてくれたぞ）

と歌をよまれました。少女に教えられて敵をやりすこして当麻道（今の竹内峠）を越えて無事に大和へ入られた皇太子は、のちに桜井市磐余の稚桜の宮で即位されました。

この履中天皇は、即位したあとで、穴虫峠で道を教えてくれた少女を捜しに行きますが、そのような少女はだれも知らないということでした。

峠から見わたすと、大和盆地のあなたは山々が青い垣根をめぐらせたように連なり、正面には美輪山が見えます。二上山の裾野には点々と泉がちらばってキラキラと輝き、馬見の低い丘陵が続いています。

天皇がどうしたものかと思いつきながら歩いていくうち、峠から少し入って隠されたような場所に、たくさんのお鶴がまるで羽根をひろげて群がっているようなまっ白い岩が連なる峯が見つけられたのです。

この峯は、この世のものとは思えない白い岩の山でした。白く美しい岩のそばに天皇がなんとなくつかしい気持ちで立っていると、背後に何かの気配を感じました。ふりかえると、白い衣を身につけたあの少女が立っているではありませんか。天皇がいそいでそばに近寄ろうとすると、そこにはもう少女の姿はなく、一羽の鶴が飛び立ち、今にも沈みそうな太陽の中へ吸い込まれるように消えていったのです。

天皇はしばらくその場に立ちつくし、金色に輝く夕焼けの美しさに目を奪われていました。あの少女は、この白い山の精霊だったにちがいない。

天皇は、峠を守る神さまが、自分を守り天皇となるよう導いてくれたのだと確信し、心から感謝されたのでした。山の精霊たちの遊び場とも思われるこの美しい白い岩の峯。たくさんのお鶴が群れ戯れているように見えるので、いつのころからか人々は屯鶴峯とよんで、敬い、大切に、親しんで来たのです。

文・岡本 智子 絵・京田 信太良

